



# 「緑の油田」開発

桑野 巍

住民みんなが「ゆとりある生活、豊かな自然、美しい景観」を求めている。ところが天邪鬼ならずとも都市住民は「ゆとりなんてないよ」「自然は荒らされているのではないか」「景観も汚くなっている」と訴える。都市住民はなぜ不満ばかり言うようになったのだろうか。

社会全体の甘え体質化か、物の豊かさか、公共心の欠如か、個人個人のわがままさか、政治の貧困か、マスメディアのせいかな、結論は出てこない。住民一人ひとりが胸にじっと手をあててみればわかることだろうが、自身も住民の心底がつかめているようで、実はわかっていないから「なぜ」の扉を開くことができないでいる。

深く追求しても始まらないが頭の中のもやもやを晴らそうと思って地元の農業祭に足を運んだ。農業を愛するがゆえに毎年会場に顔を出す。堺市大仙公園の一角に農水省近畿農政局のブースがあった。そこで同局発行の季刊誌「アグリート」に出合った。注目したのは同誌の「脚光浴びるバイオ燃料、主役は農林水産業」という特集記事だ。バイオ燃料の原料（バイオマス）はほとんどが農作物や木材に由来するため、農山村に存在します——という書き出しだった。農地が「緑の油田」になるという夢の時代の到来を告げており、地味ながら好感がもて興味深い力作だった。

世界的にもバイオ燃料の導入拡大が進み、日本でも一昨年3月閣議決定された「バイオマス・ニッポン総合戦略」があるそうで、バイオマスの輸送用燃料としての利用に関する戦略が明記されており、力強さを覚えた。同誌によると、燃料の原料はトウモロコシ、サトウキビなどからバイオエタノール、なたね、大豆などからバイオディーゼル燃料が世界の二大潮流だという。

バイオマスとは「地球上に生命と太陽エネルギーがある限り、持続的に再生可能な生物由来の有機性資源」という定義が一般的らしい。自身は科学や化学は大の苦手だが記事はわかり易かった。バイオ燃料は大気中の二酸化炭素が増加しないカーボンニュートラルの性質をもっており、温室効果ガスの削減

に効果が期待されるというから天地からの恵みものだ。

バイオ燃料の原料となるトウモロコシ、サトウキビ、なたね、大豆などはすべて農地で生産されるし、海藻からエタノールを生産するという試みもあり、この先農林水産業が主役というわけだ。農林水産業の大きな役割は食料や飼料の安定供給で、これが最大の使命に違いない。将来的にはバイオ燃料などのエネルギー資源供給の面での貢献が不可欠で、一段の技術開発を望みたいし、農山漁村のさらなる活性化や新たな雇用確保に力点を置くべきとも考えた。

緑の油田構想が原油価格を大幅に下げることが不可能に近いが、環境を守ることは必ずや貢献するだろう。かつて国際的なヘッジファンドが広大な土地を保有する各国で農地や山林を買い漁っているという情報が飛び交った。これがガセネタだったかどうか確認するすべもなかったが、日本は狙われなかった。ただ日本にはいまでも農業耕作放棄地がある。昭和45年、米の生産調整から始まった休耕田政策はいまも継続され、平成17年現在38万ヘクタール（全耕地面積は467万ヘクタール）もの田畑が遊んでいる。

年々農業従事者が高齢化などで減少し、労働者不足や里山の荒廃を歎いているだけでなく、この休耕田をバイオ燃料の生産に活用したらどうか。休耕田の最大活用は「食料も燃料も」に通じるのだ。

すでに新潟、兵庫、岩手の各県では休耕田を利用したエタノール含有の多収穫米の試験栽培を始めていると聞くが、一段の行政支援と情報提供を望みたい。同誌によると、滋賀県のNPO法人「花プロジェクトネットワーク」では菜の花を核としたバイオディーゼル燃料の製造利用を通じて資源循環型の地域づくりを推進中という。農山村は限界集落ではなく、元気再生の情報発信基地と位置づけるべきだ。「手づくり、物づくりの原形は農家にあり」で、環境に優しい次のエネルギー資源開発こそ“表彰状”ものだろう。

（自治大阪編集委員会顧問  
時事通信社元大阪支社長）